

森とカテドラル

— der RHEIN と la SEINE の間で — 15

アルプス越えルートでエトルリアとの交易が盛んになるにつれ、西部ケルト文化の中心はブルゴーニュ地方より北上し、シャンパーニュ地方からモーゼル川流域にかけた一帯へと移る。セーヌ川とライン河の間、それぞれの支流であるマルヌ川とモーゼル川流域が、ラ・テーヌ文化と呼ばれる盛期ケルト文化の一翼を担うことになる。

ベルギー南部のアルデンヌ高地を越えたところに広がるこの地方は、なだらかな起伏の間に泉が湧き、小川がたくさん流れている。マルヌ川流域からの出土品はパリ郊外の古代博物館だけではなく、この地のシャロン・アン・シャンパーニュやランスの博物館にも残されている。金属器と共に出土、陶器の形の力強さには、遙かなあこがれを抱く。「構造」の持つ美しさこそ美の本質となる。装飾に特色のあるケルト美術に於いてさえ、かたちの強さを失えばデカダンスとなる。

ラ・テーヌ文化は BC 5 世紀頃から始まると言われているが、ギリシャ美術は強さが失われつつあった。ケルト文化もやがてローマ文化の下に矮小化していく。この地の美術が新たな力を得るには、フランク族の台頭を待たねばならない。こういう美術の盛衰は美術史的知識を越えたところで感知されるものであり、「かたち・構造」は私たちの内側にこそ、つくられる。

去年暮れの大嵐による倒木が至るところに見られるシャンパーニュ地方を訪れた。雪の残るアルデンヌを越えると、マルヌ川に至る道は復旧されたばかりのように見える。シャロン・アン・シャンパーニュの聖母マリア教会のガラス窓も大嵐で壊れたと、教会守が 12 世紀のステンドグラスを案内しながら話してくれた。

ケルトのラ・テーヌ文化の故郷を訪ねる旅はそのまま 12・13 世紀のステンドグラスを訪ねる旅となる。冬季閉鎖中のカテドラルを守る婦人は、翼廊の扉を開



白く輝くヴィトロ

けて待っていてくれた。ここにも 12 世紀からのステンドグラスが残されており、外陣上の 13 世紀のステンドグラスを、静まり返った中でスケッチした。

1957 年 4 月 28 日、森有正は「重い心を抱いて」ここを訪れた。「ものういオルガンの音の流れる中に、僕は、外陣の上方にある、王者のような白い美に輝く十三世紀のヴィトロを見つめた。何かが僕の中で崩れていくのが感ぜられた。無限の悲しみが湧き出して止まらなかった。運命はどうとう僕をここまでつれて来た。」と書いている。『流れのほとりにて』

美しいものに触れ、私たちの心がしだいに「かたち」づくられていくことが「運命」なら、かたちを得たいと思うことが「意志」ならば、運命と意志とは一致する。

「何処を描くのか?」「水は持っているのか?」と世話を焼いてくれた婦人は、旅行案内所付きのガイドがステンドグラスについてあまり説明をしないと残念がっていた。「フランスでもっとも美しいもののひとつなのに。」確かにここの information はラ・テーヌ文化についても古いステンドグラスについても把握していなかった。「私はうまく説明できない。朝は、この窓が光を受けます。」

知識を越えるもの。内部にかたち (form) を得た人が、他の人のところの中にかたちをつくる (inform)。

画家 五味政明